金子「狭山茶場碑」について

整理番号	題額	題額揮毫	碑記撰文	碑記揮毫
入間〇三	狭山茶場碑	佐藤榮作	佐藤一齋	大舜臭

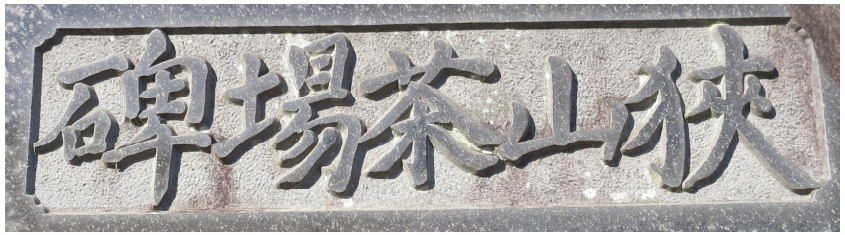
鐫刻	撰文建碑年	住所	場所	備考
—	一八五七・安政四 一九七一・昭和四六	金子中神	豊泉寺	

一．はじめに

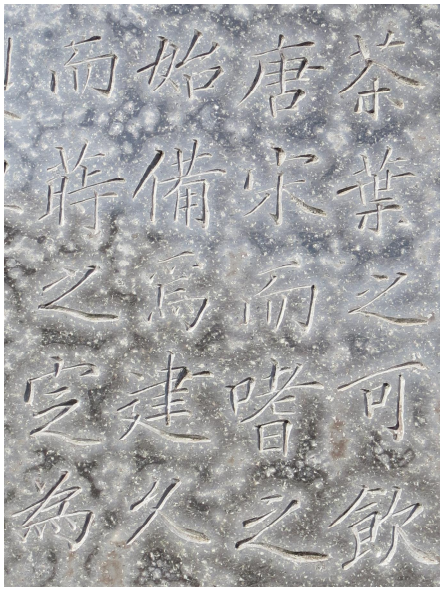
江戸時代の狭山茶の復興は、宮寺郷で始まったが、その北に位置する金子郷でも、次第に茶業が盛んになってきた。そこで、宮寺郷の「重闢茶場碑」に対抗して、金子郷における茶業の発展をうたう石碑が構想され、安政四年に、時の大儒佐藤一齋撰文、大舜臭書による「狭山茶場碑」の碑文が作られた。ところがどういう経緯かは不明だが、建碑に至らず、長く筐底にあった。それが、昭和四十六（一九七一）年、入間市中心部にあった茶業研究所を金子郷に移転することを契機として、金子郷の「狭山茶場碑」が建碑されるに至った。

〇写真１　石碑正面

○写真２　題額



○写真３　「碑記」部分



二．翻刻と訳注

■翻刻（正面）

●題字

碑場茶山狭

●碑記

内閣總大臣佐藤榮作題額

茶葉之可飲服自古言之魏晋之閒髙人韻士愛其清味者稍稍有焉至唐宋而嗜之益多而陸鴻漸之經出其採摘蒸焙之法與留藏烹煎之訣始備焉建久年閒有榮西禅師者入宋歸國齎茶種其徒髙辨相地之宜而蒔之乞為五塲武州狭山其一也當時始知茶之可喫然事在草創其製粗惡至永禄中兵燹並起民戸衰替塲亦荒癈而嘉種混於草莽國家建櫜士民安業土人又有種茶者文政之初郷老胥議大闢其塲茶戸復起製造各得其法而狭山之茶冐出於世矣爾後其製愈精其業愈盛至今四十年隣里郷曲相随培植歳収不知幾千斤也至於茶戸相謀先期其日而各齎其丹製於金子郷以頒四方概無虚月云抑夫茶之為物生於山水秀麗之間蘊乎風露清虚之氣於是生於山閒者最為超陸之經

曰巴川峽山有兩人合抱者因謂峽與狹字相似而音亦相近髙辨播茶種或擬巴川峽山而名其地年暦之久今誤為狹山亦不可知也頃者郷人来請碑記余也齡躋八秩四方文辭之索一切絶之然此請則在不可辭者焉蓋茶之滌煩療渇清神輕骨常服之而致嗜壽者古昔已有其人焉余素同嗜於陸氏而至今神力未衰耳聰目明由服茶之功而能致此亦不可知也併而記之

安政四年丁巳三月下浣八十六老人　一齋藤坦撰　大舜臭書

昭和四十六年十一月　狹山茶塲碑建設會　建之

●異体字など。

○韻　韻。　○亘　宜。　○之　定。　○塲　場。　○茶　茶。　○國　國。　○冐　再。　○歳　歳。　○所　所。　○虗　虛。

○或　或。　○亦　亦。　○辭　辭。　○此　此。　○能　能。

■**訳注**

●**本文**（いわゆる旧字体とし、一行毎に改行した）

茶葉之可飲服、自古言之。
魏晉之間、高人韻士、愛其清味者、稍稍有焉。
至唐宋、而嗜之益多。
而陸鴻漸之經出、其採摘蒸焙之法、與留藏烹煎之訣、始備焉。
建久年間、有榮西禪師者。
入宋歸國、齎茶種。
其徒高辨相地之宜而蒔之。
定爲五場、武州狹山其一也。
當時、始知茶之可喫。
然事在草創、其製粗惡。
至永禄中、兵燹並起、民戸衰替、場亦荒廢、而嘉種混於草莽。
國家建櫜、士民安業、士人又有種茶者。
文政之初、郷老胥議、大闢其場、茶戸復起。
製造各得其法、而狹山之茶再出於世矣。
爾後其製愈精、其業愈盛、至今四十年、隣里郷曲相隨培植、歳収不知幾千斤也。
至於茶戸相謀先期其日、而各齎其所製於金子郷、以頒四方、概無虚月云。
抑夫茶之爲物、生於山水秀麗之間、蘊乎風露清虚之氣。
於是生於山間者、最爲超。
陸之經曰、巴川峡山、有兩人合抱者。
因謂、峡與狹字相似、而音亦相近。
高辨播茶種、或擬巴川峡山而名其地。年暦之久、今誤爲狹山。亦不可知也。
頃者郷人來請碑記。
余也齡躋八秩。
四方文辭之索、一切絶之。
然此請則在不可辭者焉。
蓋茶之滌煩療渴、清神輕骨、常服之而致嗜壽者、古昔已有其人焉。
余素同嗜於陸氏。
而至今、神力未衰、耳聰目明。
由服茶之功、而能致此、亦不可知也。
併而記之。
安政四年丁巳三月下浣
八十六老人　一齊藤坦撰
大舜臭書

昭和四十六年十一月　狹山茶場碑建設會　建之

●**訓訳**

茶葉の飲服すべきは、古より之を言ふ。
魏晉の間、高人韻士、其の清味を愛する者、稍稍として焉有り。

唐宋に至りて、之を嗜(たしな)むもの益々多し。
而して陸鴻漸の經出でて、其の採摘蒸焙の法と、留藏烹煎の訣と、始めて備はる。
建久年間、榮西禪師なるもの有り。
宋に入りて國に歸り、茶種を齎す。
其の徒高辨、地の宜しきを相て之を蒔く。
定めて五場となし、武州狹山は其の一なり。
時に當りて、始めて茶の喫すべきを知る。
然れども事は草創に在りて、其の製は粗惡なり。
永禄中に至りて、兵燹(へいせん)並び起り、民戸衰替し、場も亦た荒廢して、嘉種草莽に混ず。
國家建櫜し、士民業に安んじ、土人又た茶を種うる者有り。
文政の初め、郷老胥に議し、大いに其の場を闢く。茶戸復た起つ。
製造各々其の法を得、而して狹山の茶再び世に出でたり。
爾後其の製愈々精にして、其の業愈々盛んなり。
今に至るまで四十年、隣里郷曲相ひ隨ひて培植し、歳収幾千斤なるかを知らず。
茶戸相ひ謀りて先に其の日を期して、各々其の製する所を金子郷に齎し、以て四方に頒つに、概ね虚月無しと云ふに至る。
抑々夫れ茶の物たるや、山水秀麗の間に生じ、風露清虚の氣を蘊(つ)む。
是(ここ)において山間に生ずる者を、最も超となす。
陸の經に曰はく、「巴川峽山に、兩人の合抱せる者有り」と。
因りて謂(おも)ふ、
「峽と狹とは字相ひ似て、音も亦た相ひ近し。高辨の茶種を播するに、或ひは巴川峽山に擬して其の地に名づくるか。年暦の久しくして、今誤りて狹山となるか」と。
亦た知るべからざるなり。
頃(このごろ)者、郷人來りて碑の記を請ふ。
余や齡八秩に躋(のぼ)る。
四方文辭の索めは、一切之を絶つ。
然れども此の請は、則ち辭すべからざる者に在り。
蓋し茶の煩を滌ぎ渇を療し、神を清め骨を軽くす。
常に之を服して嗜壽を致す者は、古昔已に其人有り。
余も素と嗜を陸氏と同じくす。
今に至るに、神力未だ衰へず、耳は聰にして目は明なり。
茶を服するの功に由りて能く此を致すか、亦た知るべからざるなり。
併せて之を記す。

安政四年丁巳三月下浣、
八十六老人一齋藤坦撰す。
大舜臭書す。

昭和四十六年十一月　狹山茶場碑建設會　之を建つ

●人物

○佐藤榮作　明治三十四（一九〇一）年から昭和五十（一九七五）年。山口県の酒屋の家に生まれる。次兄は岸信介。本家の佐藤家に婿入りするが、本家は長州藩士で、曾祖父の信寛は明治維新後島根県令などもつとめた。祖父の信彦は山口県会議員を二期つとめている。東京帝国大学卒業後、鉄道省に入省。戦後、吉田内閣の内閣官房長官を務めたのを皮切りに議員となり、自由民主党に所属して、昭和三十九（一九六四）年から同四十七（一九七二）年まで、三期にわたって内閣総理大臣を務めた。本碑の題額を揮毫したのは、総理大臣時代、七十一歳のとき。

○陸鴻漸　陸羽。生年不明、八〇四年没。唐の復州竟陵（湖北省）の人。別名、疾。字は鴻漸、季疵。出自不明で、上元初年（七六〇）頃、苕溪（浙江省）のほとりに廬を結んで文人達と交流したが、仕官はしなかった。茶を好み「茶経」三巻がある。茶道の元祖とされ、神格化されている。「新唐書」巻一九六本伝。

○榮西禪師　保延七（一一四一）年から建保三（一二一五）年。字は明庵。備中の人。比叡山で天台密教を学び、仁安三（一一六八）年と文治三（一一八九）年に入宋。宋では主に禅を学び、二度目の入宋後の建久二（一一九一）年に帰国すると、同六（一一九五）年に博多に日本最初の禅道場である聖福寺を建立し、日本禅宗の開祖となった。中国から茶葉を持ち込み、喫茶文化をもたらしたとされ、茶の効用などを説いた「喫茶養生記」を記したとされる。

○高辨　承安三（一一七三）年から寛喜四（一二三二）年。字は明恵。紀州の人。文治四（一一八八）に十六歳で出家し、華厳教学や禅を学んだ。のち世俗から離脱した遁世僧となり、各地を遍歴しつつ、修行と布教につとめる。建永元（一二〇六）年に、後鳥羽上皇より栂尾に土地を賜り、高山寺を再興した。本碑文にも記されているが、栄西将来の茶の種子を日本国中に広めたと伝えられるが、歴史的事実であるかどうかは確認できない。

○一齋藤坦　佐藤一斎。明和九（一七七二）年から安政六（一八五九）年。美濃国岩村藩士。諱は坦（たひら）。通称、捨蔵、字は大道。一斎は号。江戸へ出て林家の門下生となり、塾頭を務めるほど、学問が大成した。天保十二（一八四一）年に昌平黌の儒官（総長）となり、多くの弟子を育てた。安政元（一八五四）年の、日米和親条約の締結交渉では、大学頭林復斎（煒、述斎の六男）を補佐している。その著「言志四録」は、武士の心得を説いたものとして、今でも読み継がれている。本碑文を撰した安政四年は八十六歳。署名で、姓を「藤」一字としているのは、中国風の表記。

○大舜臭　不詳。

●注

○茶場　茶業農場くらいの意味であろう。農場とは、茶葉の生産だけではなく、その精製・保存、製品としての出荷までをトータルに扱う。

○魏晉之間　三国時代から晋代。紀元三～四世紀くらい。

○高人　志行が高尚な人、隠士、修道者。高人逸士は、清高洒脱で名利を慕わない人。

○韻士　風雅の士。

○稍稍　だんだんと。

○採摘　つみとる。

○蒸焙　蒸したりあぶったり。摘み取った生の茶葉を加工する工程だろう。
○留藏　貯蔵方法だろう。
○烹煎　煎は、から煎りの意味もあるが、ここでは烹と同じ意味で「煮る」。茶葉からお茶を煮出すことだろう。
○訣　秘訣。
○建久年間　西暦一一九〇年から一一九九年。
○武州狭山其一也　伝承では「狭山」の名は無く、「河越」。
○永禄中　西暦一五五八年から一五七〇年。永禄八（一五六五）年、室町第十三代将軍足利義輝が、三好義継らによって殺害された「永禄の変」を意識しているのだろう。また、永禄三年の桶狭間の戦いで今川氏が弱体化すると、パワーバランスが崩れ、永禄年間の関東は、関東管領上杉・北条・武田・里見氏らが入り乱れる戦乱に突入していた。
○兵燹　戦火。
○民戸　民家だが、全般というよりも茶を栽培するものだろう。
○衰替　おとろえすたれるさま。
○草莽　くさむら。
○建櫜　建は、鍵に通じ、閉ざす。櫜は、武器や鎧を収蔵する袋。「礼記」楽記に「倒載干戈、包之以虎皮。將帥之士、使為諸侯。名之曰建櫜。然後天下知武王之不復用兵也（武器はさかさまにして車に載せ、虎の皮で包んだ。軍の将軍や士卒は諸侯とした。これを「密封して納める」という。かくして天下は、武王がもう二度と兵事を起こすことがないことが理解できたのである）」。軍隊をおさめて平和になったことを言う。
○士民　士人と人民。もろもろのひとびと。
○士人　その土地の人。ここでは狭山の人だろう。
○文政之初　文政元年は一八一八年。「重闢茶場碑」に、文政年間に宮寺郷の村野らが、茶場を再開したと伝える。
○郷老　郷村の老人。老人とは、高齢者というよりも、経験豊富な実力者の意味。ここでは具体的には、村野盛政と吉川温恭（「狭山茶業史」等参照）。
○精　精妙。究められて奥深い。精巧微妙。
○至今四十年　文政元年から、この碑文撰文の安政四年までは、三十九年。
○隣里　となり村、近村。
○郷曲　かたいなか。隣里郷党の語もある。
○培植　栽培する。
○金子郷　加治丘陵の南麓を東西に走る、いわゆる「根通り」（豊岡街道）が狭山茶流通の最初の動脈であった。金子郷はこの中心地。
○頒　頒布、広く配る。
○虚月　貢物を受けない月。ここでは製品が搬入されない月だろう。
○秀麗　きわだって美しい。
○蘊　積み重なる、気がそこに結ぼれ貯まる。
○風露　風と露。露を帯びた湿った風だろう。
○清虚　きよらかで混じりけのない。
○超　並ではない、抜きん出る。

○陸之經曰　陸羽「茶經」巻上に「茶者、南方之嘉木也。一尺二尺、乃至數十尺。其巴山峽川有兩人合抱者」とある。
○擬　なぞらふ。まねる。
○八秩　八十年。秩は、十年を数える詞。
○躋　のぼる。
○四方　東西南北。あらゆる方角からの。どんなひとからの依頼も断ること。
○索　もとめ、依頼。
○滌　洗い流す。
○煩　もだえ、いらだち。滌煩子は、お茶の別名。唐施肩吾（七八〇～八六一）の「見說郛」詩に「茶爲滌煩子、酒爲忘憂君」の句がある（「全唐詩」巻四九四）。
○神　精神。
○骨　肉体。
○嗜壽　嗜は、耆に通じる。少し後に「余素同嗜於陸氏」の句がある。それに引かれて誤ったか。耆壽は、年老いた人望のある人だが、長寿ということだろう。
○神力　精神と体力。
○下浣　陰暦で下旬。
○昭和四十六年　西暦一九七一年。

●口語訳（章立てと小見出しは訳者が便宜的につけた）

【中国のお茶愛好の歴史】

お茶を飲み服用することができることは、古くから言われてきたことだ。

魏晉の時代には、志行が高尚な隠士や風雅の士で、茶の清らかな味を愛好するものがだんだんと出てきた。

唐宋の頃になると、お茶を嗜むものが益々多くなってきた。

そして、陸羽の「茶経」が登場すると、茶葉の採集の仕方や加工法、貯蔵や煮出し方の秘訣が具備し、お茶のおいしい作り方と飲み方が確立した。

【日本への導入】

平安時代末期の建久年間、榮西禪師が、宋から帰国し、茶の種を日本にもたらした。

彼の弟子である高辨は、栽培に適した土地を調べて、お茶の種を蒔いた。五カ所が適地とされ、武蔵国狭山がそのひとつであった。

このとき、日本で初めてお茶を喫することが導入されたのである。

【茶場の衰退】

しかし、ことは草創期であり、お茶の製法としては粗悪な段階に留まっていた。

そして、永禄年間に至ると、将軍足利義輝が殺害されるなど、室町幕府の権威は堕ち、日本は戦乱の時代に入る。関東でも、諸大名が覇権を争って戦火があちらこちらで上がり、茶業をなりわいとしていた農家も衰退し、茶場も荒廃、せっかくの良質な茶種も草藪にまぎれて埋没し、消滅してしまった。

【元和偃武と茶業の復活】

それが、徳川将軍により天下が治められ、江戸幕府が成立すると、武器がしまい込まれて二度と戦乱の時代に戻らないことが明らかになった。ひとびとはそれぞれの生業に安心して従事できるようになり、狭山ではふたたびお茶の栽培に手を染めるものも出てきた。

【文政の茶場の復活】
　文政年間の初め、狭山の実力者たちがともに協議し大々的に茶場を開設することにした。かくして、茶業をなりわいとする農家が再び立ち上がることとなった。
　お茶の製造方法は、それぞれ最適なものを得るに至り、狭山の茶が、再び世の中に流通するに至ったのである。
　以後その製造方法は改良を加えられていよいよ精妙なものとなり、狭山の茶業はますます盛大なものとなった。
【茶業の成功と集散地としての金子郷の重要性】
　それから今に至るまで四十年たったが、近隣の村々もあいついで茶業に参入し、年間収穫は、幾千斤にのぼるかも分からないほどになった。
　茶業農家たちは販売方法について取り決めをした。あらかじめ納入日を決めておき、それぞれが製造したお茶を金子郷の集積地へ搬入し、そこから日本全国へ発送することにした。金子郷への集積はたいへんにぎわい、お茶が搬入されない月は無かったと言われるほどだった。
【「狭山」の名の由来、一説】
　そもそも茶葉というものは、きわだって美しい山水に生じて、湿り気を帯びた風にふかれて清らかで混じりけのない「気」を積み蓄えたものである。
　だから、山中で生育するものが最も優れているとされる。
　陸羽の「茶経」に「巴川峡山に、二人抱えほどの太さのものがある」とある。
　そこで、わたしは考えた、
「峡と狭とは字が似ており、発音も近いものがある。高弁が茶の種を蒔く地を選んだとき、「茶経」にいう「巴川峡山」になぞらえて、その土地に「峡山」と名前をつけたのかもしれない。そして長い年月の中で、「峡」を「狭」に誤り、今の「狭山」となったものだろうか」と。
　これもまたよくわからないが。
【建碑の企て】
　近頃、金子郷の人がやってきて、わたしに碑記を撰文するよう依頼してきた。
　わたしは、もはや年齢は八十を超えている。そこで、文章を書いてほしいという依頼は、どなたからのものでも、一切断っている。
　しかし、今回のこの依頼については、辞退できないものがある。
【一斎の茶愛好と碑記撰文】
　思うに、お茶は、煩わしい気持ちを洗い流し、喉の渇き癒やし、精神を清らかなものにして体を軽くしてくれるものである。
　お茶を常用することで、長生きをしたものは、古今を通じてたくさんいる。
　わたしも陸翁と嗜好を同じくしてお茶を愛飲してきた。
　今に至るまで、精神も体力も全く衰えることなく、耳も遠くなることはなく、眼もよく見える。これはお茶を服用してきたことの効果がもたらしてくれたものかもしれない。
　この駄文を、付け加えておく。
【記事】
安政四年丁巳の歳三月下旬、
八十六老人である佐藤一斎、名は坦が撰文した。

大舜臭が書した。
昭和四十六年十一月、狭山茶場碑建設會が建てた。

三．主な参考資料

①本文翻刻

・入間市『入間市史』中世史料・金石文編（一九八三）

②訓読ならびに解説

・大護八郎、埼玉県茶業協会著『狭山茶業史』（埼玉県茶業協会、一九七三）。

③関連碑文

・宮寺「重闢茶場碑」（「入間〇二」）
・宮寺「茶場後碑」（「入間〇四」）
・金子「北狭山茶場碑」（「入間〇五」）
・瑞穂「狭山茶場之碑」（「東京〇一」）

以上

二〇二四年七月、薄井俊二訳す

（背面）

狭山茶場碑建設の由來　本茶場の碑は銘園五場の一であった狭山茶場の再興を記念する爲に當時郷人によって組織せられた茶市の會員相謀って安政四年三月選文を昌平校塾長佐藤一齋翁に請ひ揮毫を大舜臭に囑し金子郷最初の茶場碑として發起せられたが如何なる事情にや實現に至らず以來星霜百十五年を經過し文書は徒らに筐底にあり遺憾とするところであった昭和四十五年八月埼玉縣立茶業研究所が金子村區に移轉せらるるに當り郷人中島幸太郎深く之を慨き浅見忠治田中貞治水村誠一等多數の同志と議し之を再興建碑したものである

狭山茶場碑建設會建之　谷村憙齋書

＊人名省略